



Title	幻の「詩学」第2巻
Author(s)	当津, 武彦
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1975, 9, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48119
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

幻の「詩学」第2巻

当 津 武 彦

アリストテレスの「詩学」に第2巻があったのではないか、という推測は、16世紀の Victorius⁽¹⁾以来多くの人たちによってなされてきた。その論拠は、(1) アリストテレスの著作に関する古人の目録や索引のなかに、「詩学」を2巻としているものがあり、(2) 古人の引用文にも、複数形で表現しているものがみられること、(3) アリストテレス自身の cross-reference でも、こうした複数形が用いられ、(4) しかもそのなかには、「詩学」において詳論が約束されながら、現存の「詩学」にその該当箇所は見当たらないものがあり、且又、古文獻にも内容上第2巻との関連を示唆するものがあること、などである。これに伴って、第2巻の構成と内容、その亡失の理由と時期なども論題にされてきた。吾々はまずこの論拠の吟味から始めなくてはならない。

(1) Diogenes Laertius や Hesychius と推定される人物の著作目録では、「詩学」はあきらかに2巻とされ⁽²⁾、さらにプトレマイオス王朝期の哲学者の断片でも、これを2巻とする索引が付されている。⁽³⁾これらの資料は Zeller によって、現存の「詩学」がより大きな作品の一部にすぎぬことの証言にされ、⁽⁴⁾ Rose もこれをまとめて、Andronicos が作製した著書目録がプトレマイオス王朝時代に伝わり、Favorius を経て、Diogenes や Hesychius に達したという系譜をたどることで、こうした目録、索引の正当性を保証したのである。⁽⁵⁾

しかしこの直線的な系譜のたどり方には反論が多い。McMahon は Diogenes の著作目録の杜撰さから推して、その源流がアリストテレスの哲学に造詣の深かった Andronicos にあるとは思えぬという立場をとる。⁽⁶⁾ 事実この目録には、アリストテレスの名を冠する限りの書名を網羅しただけの未熟さがみられるとともに、吾々の現有する Corpus Aristotelicum と一致する書名は僅小であり、⁽⁷⁾ Cicero の叙述や、Halicarnassos の Dionysius や、Galenus の著作表とも一致せぬこと、⁽⁸⁾ などから、Andronicos とは別系統の Hermippos にその起源を負うのではないか、という推定も成立している。⁽⁹⁾ その限りでは、この目録に若干の手直しを加えただけの Hesychius の著作表にも同様の疑問がもたれる。⁽¹⁰⁾ プレトマイオス王朝期の索引のごときも、最近の論者によって、歴史記述上の誤謬が指摘されており、⁽¹¹⁾ これだけでは、「詩学」第2巻の存在をたしかめるまでにはいたらないように思えるのである。

(2) 他方また「詩学」に関する古人の言及のなかにも、これを複数形で表示しているものがみられる。5世紀の Ammonius や Boetius は、アリストテレスの De Interpretatione についてそれぞれの作品を残しているが、「詩学」に触れる場合、ともに複数形で表現している。⁽¹²⁾ 「修辞学」に関する初期の無名の註釈家も、geloion の問題が「詩学」で論じられたというくぐりで複数形を用い、⁽¹³⁾ 最後期のペリパトス派に属する Eustratius も倫理学に関する言及のなかで「詩学」第1巻とわざわざ断っているところからみて、第2巻の存在が含みにされているようにみえるのである。⁽¹⁴⁾

しかしこうした複数巻の表示のほかに、単数形を用いる場合もまた数多いのをみのがすべきではない。Zeller は Aphrodisias の Alexandros が単数形を用いているのを例にとり、3世紀には「詩学」は1巻しか知られていなかったと語っている。⁽¹⁵⁾ 5世紀のアルメニアの David もアリストテレスに1000の著作名を帰し、複数巻の書名も多々あるなかで、「詩学」は単数形になっている。⁽¹⁶⁾ これらの事例から、第2巻の存在を一応想定する

Bywaterでさえ、ビザンチン時代には第2巻は完全に忘却され、A^cにおける書名が単数形になっているのも、第2巻への記憶が全く残っていないことの証明であるという。⁽¹⁷⁾

さきの Ammonius の場合、彼は David とならんで、Syrianus の弟子といわれ、父に Hermias、弟子に Philoponos の名が伝えられている。ところが Ammonius とは反対に、David はもちろん、Hermias、Philoponos も「詩学」を単数形で表している。⁽¹⁸⁾ この例からしても、「旧き人たちは「詩学」2巻に通じ、新しき人たちは第1巻だけしか知らなかった」という Zeller⁽¹⁹⁾ の見解は牽強付会といわざるをえない。Boetius と Eustratius についても、その内容を点検すれば、「詩学」よりもむしろ、今日断片の形でしか伝わらない対話篇「詩人について」から引用されているとみるべく、兩書はその近似した標題と内容のために一括され、その結果、複数形の表示がとられたのではないか、という意見もあるわけである。⁽²⁰⁾ 「修辞学」の無名の註釈家の場合も、なるほど複数形を用いてはいるものの、彼とは別人のやはり無名の註釈家は同じ文章について、単数形を使っている。⁽²¹⁾ 「修辞学」の同一原典をもちながら、引用文にこうした差異がみい出される以上、外的証言だけで第2巻の存在を云々することにいよいよ困難が感じられるばかりである。

(3) しかしながら、アリストテレス自身も「政治学」において1度、「修辞学」において6度、「詩学」に触れているが、⁽²²⁾ いづれの場合にもこの書を複数形で表している。この事実は著者自身の内的証言とみられるだけに、(1)、(2)にもまして注目されることになる。とくに、こうした cross-reference はアリストテレスの思想をその内面から体系的に理解していくための有力な手がかりになるとともに、著作の先後関係の決定にも大きく貢献するはずのものとなるからである。例えば「修辞学」において「詩学」に言及していることは、「詩学」の方が「修辞学」よりも先に書かれたことの証拠であり、また、「政治学」において「詩学」が未来の著作に

されていることは、もちろん「政治学」の方が先行していることを証明している。

しかしこうした cross-reference の指示をどこまで信用することができるか。例えば、「詩学」第19章においてディアノイア論を展開するに当たって、その詳論は「修辞学」に譲る旨の言及 (1456 a35) があるが、これは「修辞学」の方が「詩学」よりも先に書かれたことを物語っているではないか。この相互引用について、Lienhard は、「修辞学」は「詩学」の初稿を引用しているのであり、「詩学」における「修辞学」の引用はその前後のディアノイア論が改稿であることを示している、と論定している。⁽²³⁾しかしこうした苦心の解釈は、逆に cross-reference が果してアリストテレス自身のものなのかどうかを疑わせる結果にもなる。もしそれが著者自身のものだとなれば、アリストテレスは哲学活動のそもそものはじめから、自らの哲学体系について完結した構想を抱き、すでに完成した著作についてのみならず、これから著わそうとする作品について、その標題のみならず、内容についても確乎とした当初計画をめぐらしていたことになる。⁽²⁴⁾しかし史上のいかなる思想家にとっても、こうした緊密にして斉合的な計画性は期待できない。もちろんアリストテレスの作品自体が講義案という特殊な形式のものであり、本来は彼の手稿にすぎなかったという定説に従えば、彼の哲学活動の全期間にわたって、加筆補遺の可能性はのこされているわけであろう。問題の cross-reference もそうした完全性への志向の一端を窺えるものとみることもできる。しかしもしアリストテレスにこうした意志があったとなれば、約35年間にわたる彼の著作活動は、手稿から講義案へ、講義案から論著へ、論著から体系へと徐々に完成化の過程をたどったにちがいないが、「政治学」や「形而上学」のごとき未完の大作には、こうした意志の完全な欠落がみられるのである。

いま、もしアリストテレスの書名でさえ、彼の死後数百年までは確定した状態にはなかったという Shute の意見をそのまま容認するとすれば、書名をはっきりとうち出している cross-reference はあきらかに後代の、お

そらくは ペリパトス派の人たちによる挿入とみる見方が正当化されるかもしれない。とくに講義案の esoteric な性格は予備知識の必要性を増す。理解のため の補助手段として挿入文の要求されるのも当然であろう。⁽²⁶⁾それは「偉大な 言葉の節約家」⁽²⁷⁾たるアリストテレスの間なき問答法に再び問を挿入する試みに似ている。かのペリパトス派の人たちは、アリストテレスの真作と目される作品群の殆んどが複数形の標題をもっていることに準じたのか、それとも(2)の議論にみたごとく、対話篇「詩人について」との関連性から複数形を採用したのか、いずれにせよこうした疑問は、「詩学」第2巻について明快な結論を下すことを吾々に許さないのである。

(4) いま一步譲って、cross-reference をそのままうけとめ、その内容を検討することにしよう。「政治学」(Ⅷ, 7, 1341b38-40)ではカタルシスの問題にふれ、その詳論を「詩学」に委ねているが、「詩学」では第6章の悲劇の定義の中で単に指摘されただけに終わっている。カタルシスは一体どこで論じられたのか。その基本的意味は「問題集」の中で充分論じられているので、「詩学」ではとくに再論しなかったとする Margoliouth,⁽²⁸⁾それは理想国から詩人を追放せんとしたプラトンへの批判を趣意とするはずであるから、「政治学」後半の喪失された部分で論じられたとする Finsler,⁽²⁹⁾「詩学」は講義案なのだから、その説明は口頭で補なわれたにちがいないという説、など様々な臆測の交錯するなかで、いちはやくこれが「詩学」第2巻において論じられたと断定したのは、Bernaysである。彼は、5世紀の Proklos の文章のなかにカタルシス論の反映をみとめ、これを「政治学」の光に照らして解明し、いわゆる「医療的カタルシス論」を定立したのである。⁽³⁰⁾しかしこれが今日半ば定説化されながら、尚批判的意見がきわめて多いことは周知のごとくである。すでに Bywater もいう。Proklos がカタルシスの代りに用いている aphosiōsis, aperasis なる用語は、アリストテレスの現存著作には全くみ出されない、彼がカタルシスに関する意見を引き出したのは、アリストテレスに限られず、むしろ他の多くの演

劇論者からではなかったか、と。⁽³¹⁾もちろんカタルシスをどのように解釈するにせよ、これが悲劇の定義の中にあらわれている以上、演劇に関する全問題を集約するかたちで、第2巻の棹尾において論じられたと推理する Vahlen の主張もそれなりに評価されよう。⁽³²⁾しかしながらカタルシス論の場がどうしても第2巻でなければならないという確証は、実はどこにもないのである。最近のカタルシス論が、Bernays の洶湧説離れを企て、Else⁽³³⁾や Ničev⁽³⁴⁾のごとき、それぞれの結論は異なるにせよ、「詩学」を「詩学」から解釈する立場をとっているのも、一切の論旨が現存の「詩学」において完充し、あえて第2巻を仮想する必要なしとする着想に出ずるものである。カタルシス論と第2巻の直結は、「詩学」解釈の歴史の中で、いまは反省期に入っているとみるべきではないか。

「修辞学」の cross-reference のうち、lexis に関するものは、「詩学」の第20章—22章に対応しているが、geloion に関する2つのものは、その該当箇所をみい出すことができない。Bywater はこの不均衡を重視し、喜劇の主題をなす geloion の問題は、第2巻において細心な分析が行われ、その他喜劇の物語構成や措辞・語法、喜劇人物の性格についても併せて考察が進められたにちがいない、と言う。⁽³⁵⁾事実、この推察を裏付けるかのごとく、「詩学」第6章では、喜劇の後述を約束しながら (6, 1449b22)、それ以後これを果してはいないのに気付くのである。現存「詩学」の最終章たる第26章の末尾の文章を、R¹や Φ といった写本によみかえて、第2巻への移行をみる立場、⁽³⁶⁾あるいは、Tractatus Coislianus なる文献のなかに、アリストテレスの悲劇論と対応するかたちで、彼の喜劇論を探知しようとする Bernays の主張など、⁽³⁷⁾ いずれも第2巻を喜劇論とする通説を基礎づけているわけである。

しかしこの場合にも安易な断定は許されない。もしも第2巻が喜劇論であったとすれば、現状の「詩学」の第3章、4章において喜劇の発生や沿革にふれたり、第5章において喜劇の本質とみるべき phaulon の問題などについて、わざわざ先走って論じる必要があっただろうか。アリストテレ

スは喜劇についてこれらの各章で軽く触れる以上に論じる意志をもたなかったのではないか、という de Montmollin はよく問題点を突いているとみられよう。⁽³⁸⁾ 第2巻についてあくまでも懐疑的な McMahon は、第6章の喜劇論への約言を、cross-reference についての彼自身の一般見解から、写字生による挿入または誤記とみなし、削除と訂正を要求している。⁽³⁹⁾ 事実この一文は、悲劇と叙事詩の比較を論じたすぐ後に置かれ、さらに悲劇に関する第6—22章の詳論が続くわけであるから、これがなくても、context は斉合的であるというのが削除の理由であり、またここを叙事詩に関する付加的規定におきかえ、kai peri diēgēmatikēs とすることで、第23—24章の叙事詩論との関連が保たれる、というのが訂正の理由になっている。さらに、Tractatus Coislianus のなかに、第2巻喜劇論との関係をみようとする Bernays の立場も、いまや絶対的ではない。そこにみる喜劇の定義、構成要素、構成部分の論述は、すでに Bernays みずから危惧したごとく、アリストテレスの悲劇の定義の未熟な焼き直し(Travestie)⁽⁴⁰⁾ にすぎないものである。アリストパネス研究家たる Starkie⁽⁴¹⁾ はこの喜劇論を評価しているが、それにしても、そこにみる主題の統一のなさや単純な誤解などからみて、あるべかりしアリストテレスの喜劇論を逆構成することはむしろ徒労に属するといわなくてはならない。この論稿の著者は、アリストテレスの喜劇論を知っていたというよりは、むしろ知らなかった、とみることの方がより理にかなっているという Bywater の意見は正当であろう。⁽⁴²⁾

それとともに、第2巻を喜劇論とする推理を軸として、この巻の全内容についてもいろいろの想像がめぐらされてきた。喜劇、カタルシスはもとより、造型美術、叙情詩、音楽、舞踏や、デチュランボス、イアンボスをも含めて、第2巻への期待は限りなく拡大されていく。現状の「詩学」の悲劇論があまりにもその影響力が大であっただけに、第2巻への期待も大きく、それだけにまたその亡失は痛悼のきわみということになる。第2巻の亡失時期やその理由について、今日にいたるまで様々な詮議が行なわれてきたのもそのためかと思われる。もちろんこれには、第2巻は、8世紀

のシリア語訳以前のMS即ちΣと、吾々が所有している最古のギリシア語MSたるA^cの共通の原本において、すでに欠けていたとし、その欠落の時期を原本のパピルス時代にもとめ、当時の *volumen* の一般状況から、第2巻は第1巻から容易に分離される独立の巻であったことに、亡失の理由をもとめる主張もある⁽⁴³⁾。これにはまたアリストテレスの著作の伝承に関する Strabon (XIII, 609) や、Plutarchos (Sulla, 26) の半ば伝説的な物語があって、吾々に重ねて種々な推測を促すのである。その所伝によれば、かのネレオスなる人物が、アリストテレスの文庫がペルガモンの王たちの手にわたるのを恐れて穴倉に死蔵したため、書物は湿気と紙魚によって著しく損ぜられたとあるが、「詩学」第2巻もまたそのような運命に出会ったのであろうか。もちろんこうしたあやふやな伝説じみた物語のなかに、一かけらの真実をもみい出しえないとする Zeller や Jaeger や Grayeff の反論があったことをこの場合にも忘れてはならないであろう⁽⁴⁴⁾。差当って、第2巻について全称否定の態度をとることは不可能にちかいかもしれない。しかしまたその存在を主張する各種の論拠を手放しで受け入れるわけにはいかぬことをも見たわけである。現存の「詩学」の不備は事実としてみとめるにしても、その補完を安易に第2巻に託して、それ以上の考察を惜しむ態度は避けなければならないのかもしれない。現在あるがままの「詩学」にして尚その論旨の検討によって充分理解される余地をみい出すこと、それが現代における「詩学」解釈の一つの方法論になっているのを見るからである。

注

- (1) I. Bywater, *Aristotle on the Art of Poetry*, Oxford, 1909, p. xx.
- (2) W. von Christ, *Geschichte der griechischen Literatur*, Munich, 1908, i, p. 702. n. 4.
- (3) V. Rose, *Aristoteles Pseudepigraphus*, Leipzig, 1863, p. 194.
- (4) E. Zeller, *Aristotle and the Earlier Peripatetics*, trans. by B. F. C. Costelloe, 2vols, London, 1897, i, p. 48. n. 3.
- (5) Rose, *op. cit.*, p. 194.

- (6) A. P. McMahon, On the Second Book of Aristotlēs Poetics and the Source of Theophrastus' Definition of Tragedy, *H. S. C. Ph.* xxviii, 1917, p. 10.
- (7) R. Shute, On the History of the Process by which the Aristotelian Writings Arrived at their Present Form, Oxford, 1888, pp. 47, 48.
- (8) Shute, op. cit., p. 51, p. 67, p. 77.
- (9) J. E. Sandys, A History of Classical Scholarship from the Sixth Century B. C. to the End of the Middle Ages, Cambridge, 1906, pp. 122ff.
- (10) V. Rose, Aristotelis qui ferebantur librorum fragmenta (Teubner), Leibzig, 1886, p. 11. n. 1.
- (11) Bywater, op. cit., p. xx.
- (12) A. Brandis, Scholia in Aristotelem (Opera iv), Berlin, 1836, p. 99 A12; Boetius, Commentarii in librum Aristotelis peri hermēneias, ed. C. Meiser, pp. 6, 11 ff.
- (13) L. Spengel, Aristotelis Ars Rhetorica, Leipzig, 1867, i, 159, 15.
- (14) Bywater, op. cit., p. xxi.
- (15) Zeller, op. cit., i, p. 102, n. 2.
- (16) Sandys, op. cit., i, p. 76.
- (17) Bywater, op. cit., p. xxi.
- (18) Hayduck, Ioannis Philoponi in Aristotelis De Anima Libros Commentaria, Berlin, 1897, p. 269, l. 28.
- (19) Zeller, op. cit., i, p. 102, n. 2.
- (20) McMahon, op. cit., p. 22.
- (21) McMahon, op. cit., p. 14.
- (22) Pol., VIII, 7, 1341 b 39; Rhet., I, 2, 1371 b 33; III, 1, 1404a39; III, 18, 1419 b 2 (to geloion について). Rhet, III, 2, 1404 b5; III, 2, 1404 b26; III, 2, 1405a1 (lexis について)
- (23) M. K. Lienhard, Zur Entstehung und Geschichte von Aristoteles Poetik, Zürich, 1950, p. 26.
- (24) Shute, op. cit., p. 96.
- (25) Shute, op. cit., p. 96-116.
- (26) McMahon, op. cit., p. 20-21.
- (27) G. E. Lessing, Hamburgische Dramaturgie, § 77.
- (28) D. S. Margoliouth, The Poetics of Aristotle, London, 1911.
- (29) G. A. Finsler, Plato und die aristotelische Poetik, Leipzig, 1900.

- (30) J. Bernays, Zwei Abhandlungen über die aristotelische Theorie des Drama, Darmstadt, 1968, p. 1-132.
- (31) Bywater, op. cit., p. xxi.
- (32) J. Vahlen, Aristotelis de Arte Poetica Liber, Leipzig, 1885, p. 10.
- (33) G. F. Else, Aristotle's Poetics: The Argument, Cambridge, 1957.
- (34) A. Ničev, L'énigme de la catharsis tragique dans Aristote, Sofia, 1970.
- (35) Bywater, op. cit., p. xxiii.
- (36) D. de Montmollin, La poétique d' Aristote, Neuchatel, 1951, p. 191.
- (37) Bernays, op. cit., p. 135-186.
- (38) de Montmollin, op. cit., p. 192.
- (39) McMahon, op. cit., p. 28-29.
- (40) Bernays, op. cit., p. 145.
- (41) W. T. M. Starkie, The Acharnians of Aristophanes, London, 1909, p. xxxviii.
- (42) Bywater, op. cit., p. xxi-xxii.
- (43) Bywater, op. cit., p. xxi.
- (44) Zeller, op. cit., p. 148; W. Jaeger, Studien zur Entstehungsgeschichte der Metaphysik, Berlin, 1912, p. 176; F. Grayeff, The Problem of the Genesis of Aristotle's Text, *Phronesis*, vol. 1. no. 2 (1956), p. 106-109.

(文学部教授)